

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

Title	古フランス語における文頭の補語要素と語順 : CVS語順対CSV語順を基準として
Author(s)	今田, 良信
Citation	ニダバ , 22 : 80 - 92
Issue Date	1993-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00044728">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00044728</a>
Right	
Relation	



## 古フランス語における文頭の補語要素と語順

— C V S 語順対 C S V 語順を基準として —

今田良信

## § 1. はじめに

古フランス語 (AF) における文 (phrase) の主要構成素——主語 (S), 動詞 (V), 補語 (Complément : C)<sup>1)</sup>——の順序すなわち語順<sup>2)</sup>は, SVC と CVS の 2 つが最も頻繁に用いられることがよく知られている<sup>3)</sup>。そして, SVC と CVS が優勢である理由として——或いは逆に, この 2 種類の語順が優勢であることが, そう言われる理由なのかもしれないが——AF では, かなり早い時期から V を文の第 2 位に置く傾向ないし (もっと強い言い方をすれば) 原則があったと言われている<sup>4)</sup>。更に, この両語順が優勢である分布領域を節 (proposition) の種類で見ると, 研究者によって記述の仕方, ニュアンスが微妙に異なるので, 統計的な数値を拠り所としたような正確な言い方ではないが, 概ね SVC は従属節 (proposition subordonnée) に, CVS は自立節 (proposition autonome) に好んで用いられているようである<sup>5)</sup>。本稿で問題にしたいのは, 自立節において CVS または CSV という語順になる C の中身についてである。AF において動詞第 2 位という傾向があることから, S 以外の構成素である C が文頭に立てば必然的に S は V の後ろに置かれる——すなわち S と V の倒置 (inversion) が起こる——というのが一般的説明である<sup>6)</sup>。しかし, 詳しくは後で述べるが, 実際には文頭に立っても CSV となる, 或いは CVS となったり CSV となったりする C も存在する。こうしたことが何故起こるのかということは, なかなか難しい, 同時に大変興味深い問題ではあるが, その前に, それ以前の問題である, CVS 語順を取るか CSV 語順を取るかという基準に立っての C の具体的中身の記述自体がまだ不十分であり, 先ずそれに目を向ける必要があると筆者は考える。また, AF では S の省略 (omission) が頻繁に起こり, この場合も S が代名詞であれば, 倒置された後, V の後ろで省略される——従って CV という語順になる——と言われる<sup>7)</sup>。しかし, 頻度はそれほど高くないが, 倒置されても省略されていない代名詞の S もあることを考えれば<sup>8)</sup>, この説明にも問題がないとは言えない。

## § 2. 資料

本稿で, 直接テキストから引用する用例は, 全て散文資料からのものである。この資料

を散文に限った点も本稿の眼目の1つなのであるが、従来の研究では、個別の作者・作品に限った語順やその文体を問題にしたものは別として、客観的にAFの語順を論じる場合においても、資料として散文と韻文がほとんど区別されずに用いられていることが少なくない。これはAFにおける散文資料に年代的偏りがあるため、致し方ない面もあるのだが、韻文は、1行の音節数、脚韻、リズムなどといった作詩上の制約の影響を被っていないとは言えない以上、やはり、両者は資料として厳密に区別して扱い、散文資料における語順の分析を一義的に考え、それを踏まえた上で韻文の分析に当たり、その特徴があればそれを明確にするべきだと筆者は考える<sup>9)</sup>。本稿における、引用資料と略号は次の通り。

*Eustace* : *La Vie de Saint Eustace* (Version en prose), éd. J. Murray, CFMA, 1929.

*Mort Artu* : *La Mort le Roi Artu*, éd. J. Frappier, TLF, 1964.

*Queste* : *La Queste del Saint Graal*, éd. A. Pauphilet, CFMA, 1980.

Villeh. : Geoffroy de Villehardouin, *La Conquête de Constantinople*, éd. E. Faral, Les Belles Lettres, 1973.

### § 3. 問題の所在と対象

本稿で扱う文とは、具体的には平叙文(*phrase énonciative*)の単文(*phrase simple*)と複文(*phrase complexe*)であり、複文はその主節(*proposition principale*)を扱う場合と、従属節が文の構成素Cとして組み込まれている複文全体を扱う場合がある。複文の従属節内の語順は原則として扱わないが、前述の複文全体を扱うという場合の中に、その複文が更にそれ全体を包み込む従属節内にあるにも拘らず扱っているものがある。以下にCVS語順の各用例を示しておく。なお、各主要構成素には下線を引き、その略号を付すことにする。ただし、Cについては、文(または節)頭以外に位置するものは省略した。

1. *Mort Artu*, 25/59-60<sup>10)</sup>

Si la regarda messire Gauvains moult volentiers tant comme ele servi;

C V S

2. *ibid.*, 20/27-28<sup>11)</sup>

Et quant ce vint au departir, si dist messire Gauvains au roi:

C V S

3. *ibid.*, 5/15-16

et ainçois que vos reveigniez mes, serai ge touz gueriz,

C V S

4. *ibid.*, 26/31-33<sup>12)</sup>

por ce que, se vos m'amiez jusques au cuer crever, ne porriez vos a moi

C V S

avenir por nule chose,

次にCが文頭に立ってCVSという語順を取ると言われるが、このCの記述について従来の研究に不備な点があると思われるのは、具体的にどのような要素が文頭に来ればそうなり、或いはそうなることがあり、また、そうならないのかについてである。CVSとなるかCSVとなるかという視点から十分にまとめられたCの記述が見られないように思われる。そこで、語順への影響という点から考えてみるとCは次の3つに分類できよう。

(I) 文頭に立ってCVSとなるC

(II) 文頭に立ってCVSとなったりCSVとなったりするC

(III) 文頭に立ってCSVとなるC

(II)におけるCVSとCSVの頻度は様々であり、両者が拮抗しているものから、限りなく(I)や(III)に近いものまであり得る。また、(I)や(III)に属していると思われていたあるCが、頻度はどうあれ(II)に属することになるような用例が見つかる可能性もあろう。そもそも(I)や(III)に属していると言い切るのは、余程徹底した網羅的な調査を行わないと、いや厳密にはAFの全ての資料を調べてみなければ難しいことである。もとより、現時点では、資料全てを見渡した上での網羅的で統計的な記述など行うべくもない。しかし、本稿では、その前段階として、網羅的ではないが(I)、(II)、(III)の全てを対象として、それぞれに属するCの各項目にはどのようなものがあるかという視点から、従来の記述を検証しながら、上述の(I)や(III)であるかのように思われていたものの中に(II)と考えられるような用例があることなど、従来の研究では触れられていない点を付け加えられるところには付け加えて、今後に向けての布石としたい。

さて、ここでCについて、また、これ以後用いるCの下位範疇について、少し断っておきたい。Cとは、一般に語順類型論において、Oで示される目的語に当たる直接目的補語(Complément d'objet direct: C<sub>OD</sub>)、間接目的補語(Complément d'objet indirect: C<sub>OI</sub>)に加えて、あらゆる種類の状況補語(Complément circonstanciel: C<sub>c</sub>)を含む用語であるが、その中に含まれる各項目の機能が多様なため、これを厳密に一つのものとして規定するのはなかなか容易ではない<sup>13)</sup>。ただ、このCの分類を上記(I)~(III)の関係で見ると、C<sub>OD</sub>とC<sub>OI</sub>は普通曲用がありVとの結びつきが強いためか、今後反証例が見つかる可能性が無くはないので必ずとは言えないが、一応(I)にしか属しないと考えられるのに対し、C<sub>c</sub>は曲用がなく、その点ではVとの結びつきの度合いもC<sub>OD</sub>やC<sub>OI</sub>に比べれば弱く、しかも様々であって、その分各項目が(I)~(III)のどれにでも属する可能性があると考えられる。そこで、本稿では、このC<sub>c</sub>に絞って論を進めることにする。

また、語構成の点からは、C<sub>c</sub>は便宜上次のように3つに分類することができる<sup>14)</sup>。

C<sub>c-1</sub> : 単独の語(mot)

C<sub>c-2</sub> : 2語以上からなる句(locution)

C<sub>c-3</sub> : 1つの(従属)節(proposition: ~-PROP. Ex. : por ce que-PROP. etc.)

この下位分類はそれぞれ、一般的に副詞(adverbe), 副詞句(locution adverbiale), 副詞節(proposition adverbiale)と呼ばれているものを含んでおり、むしろ、これらの用語の方がよく用いられているのであるが、本稿では、この副詞或いは接続詞という用語は敢えて用いないことにしたい。副詞や接続詞という用語には、従来の定義の中に、文頭に立つと倒置を引き起こすとか引き起こさないとかいうこととの関係も規定してあるため<sup>15)</sup>、上記の(Ⅱ)に属する項目については、用語上の矛盾が起こることになる。このような場合に、倒置を引き起こせば副詞的(役割)であるとか、引き起こさなければ接続詞的(役割)である——或いは、副詞的な(役割の)ものは倒置を引き起こすが、接続詞的な(役割の)ものは引き起こさない——という言い方をすれば、どのような場合でも100%「説明」はできてしまうのだが、これはad hocな説明であろう<sup>16)</sup>。どうして同じ語彙素(lexème)でこのような差異が生じるのかという本質的問題の解決にはなっていないからである。この「引き起こす(entrainer)」という表現も、文頭のCだけが倒置の要因と決められない内は、注意が必要であろう。筆者は、これらの用語を用いることによって生じるこのような不都合や不便を避けたい。従って、本稿では、一応文の構成素と語構成の面からだけの分類によるC<sub>c</sub>, C<sub>c-1</sub>, C<sub>c-2</sub>, C<sub>c-3</sub>を用いておくことにしたい。このうち特に大切と思われるのは、従来、語順に与える影響という点からはほとんど記述のないC<sub>c-3</sub>である。

#### § 4. C<sub>c-1</sub>

C<sub>c-1</sub> VS語順を取るC<sub>c-1</sub>は枚挙に遑がない。

##### 5. *Mort Artu*, 16/71-72

einz leur avoit li rois desfendu,

C<sub>c-1</sub>            V        S

その他, *ibid.*, 71/68, etc.; *Eustace*, 38/8; *Queste*, 97/11, etc.

##### 6. *Queste*, 26/23

Or dist li contes que ...

C<sub>c-1</sub> V            S

その他, *ibid.*, 41/17 etc.; *Mort Artu*, 3/10, 23/20, etc.

他にも目についた項目を、*Mort Artu*の用例の出現箇所と共にいくつか挙げれば：

assez[13/3, 20/27, etc.], atant[22/6, 29/1, etc.], aussi[21/4, 76/9, etc.], autrement[14/24, 16/46, etc.], donques[52/7, etc.], ainsi[22/1, 30/90, etc.], encore[14/33, 45/51, etc.], illec[21/19, etc.], lors[2/9, 12/13, 14/1, etc.], moult[20/26, etc.], si[16/35, 16/62, 21/28, 25/32, 25/59, etc.], tant[20/36, 24/23, etc.], toutevoies[14/23, 16/52, 79/49, etc.], etc.

これらについては、C<sub>c-1</sub> VS以外の語順は現在までのところ見当たらない。

次に、普通はC<sub>c-1</sub> VSの語順を取りそうであるが、C<sub>c-1</sub> SVの語順も見られたのが、

maintenant, après である。筆者の分類で言えば、限りなく (I) に近い (II) ということになろうか。maintenantのみ用例を挙げ、après は用例の出現箇所のみを示す。

7. *Mort Artu*, 16/63-64

Meintenant se part Lancelos de leanz entre lui et son compaignon ...

C<sub>c-1</sub> V S

その他, *Queste*, 59/30, etc.

8. *Villeh.* 84/1-2

Maintenant li conte et li baron parlerent ensemble,

C<sub>c-1</sub> S V

après [C<sub>c-1</sub>VS: *Villeh.*, 9/1, 10/1, 11/1, etc.; C<sub>c-1</sub>SV: *Mort Artu*, 79/52].

逆に、普通はC<sub>c-1</sub>SV語順であるが、稀にC<sub>c-1</sub>VS語順となることがあるものとして、neporquant, nepor(u)ec, neportant, nequedent, onques, certes, etc.がFouletとMoignetに指摘されている。Fouletによれば<sup>17)</sup>「これらは構文に影響を与えず、全く倒置を引き起こすことができないはと断言できまいが、倒置は稀である」ということで、筆者の分類で言えば、限りなく(III)に近い(II)ということになろう。実際に両方の場合を確認することができたのは、Moignetも同じ語について、両方の場合の用例(Moignet自身は9.の代わりに*Mort Artu*, 29/7の例及び10.)を示しているneporquantである<sup>18)</sup>。

9. *Mort Artu*, 14/19-20

Et neporquant il fu moult dolenz de cest otroi,

C<sub>c-1</sub> S V

その他, *ibid.*, 29/7, 31/24, etc.

10. *ibid.*, 20/22-24

Et neporquant, ou il volsissent ou non, fist il tant par sa proesce que ...

C<sub>c-1</sub> V S

更に、Fouletでは<sup>19)</sup>「etでさえも、siの影響を受けて、倒置を引き起こし得る」ことが指摘されている。我々の資料で調べてみたところ、次のような用例が見られた。

11. *Mort Artu*, 25/20

;et li fist l'en son lit en la chambre ...

C<sub>c-1</sub> V S

その他, *ibid.*, 16/68, 79/6, etc.

§ 5. C<sub>c-2</sub>

C<sub>c-2</sub>は、語構成の点から便宜上C<sub>c-1</sub>と分けたが、現象面ではそれほどの差異は見られない。強いて差異を挙げれば、C<sub>c-2</sub>は、次の12.のような文脈による様々な項目を始めとして、13.のような熟語的な項目に至るまで、C<sub>c-1</sub>に比べてC<sub>c-2</sub>SV語順をとる項

目が少ないように思われる。

12. *Mort Artu*, 25/21-22

Icele nuit n'ala pas messire Gauvains a cort,

C<sub>c-2</sub>            V                    S

その他, *ibid.*, 25/30, etc.

13. *ibid.*, 1/8-9

; por ce commença il ceste derrienne partie.

C<sub>c-2</sub>            V            S

その他, *ibid.*, 11/12, 25/56, etc.; *Queste*, 11/23, 57/3, 64/7, etc.

その他のC<sub>c-2</sub>の項目の用例としては:

en ce[Ex.: *Mort Artu*, 24/20, etc.], par ce[Ex.: *Mort Artu*, 75/59, etc.], etc.

今までのところ, C<sub>c-2</sub> SVとなる項目として筆者が調べ得たのは, Fouletが, 稀にはC<sub>c-2</sub> VSとなる可能性を否定していないsanz failleのみである<sup>20)</sup>。

14. *Queste*, 73/18-19

, car sanz faille il est mout mielres chevaliers que vos n'estes,

C<sub>c-2</sub>            S    V

その他, *ibid.*, 182/5, 197/19, 200/28, etc.; *Mort Artu*, 45/42, etc.

## § 6. C<sub>c-3</sub>

C<sub>c-3</sub>については, 上述のように, 文頭に立って語順がどうなるかという点からは, ほとんど記述が見られない。筆者の知る限り, 現在までのところ, この点を扱ってあるものは太古(1991)のみである。この中では, C<sub>c-3</sub>の項目のいくつかについて, それが文頭に立つ複文を「一文型」と「並列型」に分類してあり<sup>21)</sup>, 参考になった。ただ, そのC<sub>c-3</sub>の項目に関する語順の記述については, 修正が必要なものも見出される。本稿の分類で言えば, 「一文型」とはC<sub>c-3</sub> VS語順(cf. 用例 3.)を指し, 「並列型」とはC<sub>c-3</sub> SV語順(cf. 注11)の用例)及びC<sub>c-3</sub>と呼応するような, または, それ以外のCがC<sub>c-3</sub>に続くC<sub>c-3</sub>CVS語順(cf. 用例 2.)を指す。この分類と比較した本稿の分類の特徴は, C<sub>c-1</sub>の場合(cf. 用例 7. と 8.)でもC<sub>c-3</sub>の場合(cf. 用例 3. と後述の16.)でも, CVS語順を取るかCSV語順を取るかという首尾一貫した基準で扱われている点と「並列型」では1つの型に含まれることになるC<sub>c-3</sub> SV語順とC<sub>c-3</sub> CVS語順が必然的に区別され, 後者はあくまでCVS語順の1つとして扱われている点である。そこで, これまでに筆者が見つかることのできたC<sub>c-3</sub>に属する全ての項目を, 用例と共に示すことにする。

i) a ce que-PROP.

C<sub>c-3</sub> SV語順の用例が見られた。

15. *Mort Artu*, 75/30-31

; car a ce qu'ele ne puet trouver qui la deffende, il couvendra a fine

C<sub>c-3</sub>

S V

force qu'ele face pes a vos ...

ii) ainz(ançois) que-PROP.

FouletもMoignetも、これをC<sub>c-3</sub> VS語順に属する項目として挙げ、しかも、この項目の用例だけしか示していない<sup>22)</sup>。Moignetが引用しているのは先に示した用例3.であるが、13世紀の散文には、用例16.のようにC<sub>c-3</sub> SV語順の例も見られる。

16. *Eustace*, 28/27-29

, e ançois qu'il a moi repairast, uns lions sailli del bois ...

C<sub>c-3</sub>

S

V

その他, *ibid.*, 36/13.

iii) de ce que-PROP.

この項目についての言及は見当たらなかったが、C<sub>c-3</sub> VS語順の用例があった。

17. *Mort Artu*, 23/23-25

De ce que nos nes trovons, fet messire Gauvains, me poise il mout durement.

C<sub>c-3</sub>

V S

iv) des que-PROP.

C<sub>c-3</sub> SV語順の用例が見られた。

18. *Queste*, 89/17-18<sup>23)</sup>

, des que tu ne me velz oster dou grant duel ..., je te pri que ...

C<sub>c-3</sub>

S

V

v) en ce que-PROP.

C<sub>c-3</sub> VS語順の場合とC<sub>c-3</sub> SV語順の場合が見られる。後者についての記述は見られるが<sup>24)</sup>、前者については、筆者の知る限り見当たらない。

19. *Queste*, 197/16-17

En ce qu'il parloient einsi, assemblerent ilec li chevalier dou chastel.

C<sub>c-3</sub>

V

S

その他, *ibid.*, 67/27, 229/19, 231/7, 241/9, 249/11, etc. ;

20. *ibid.*, 202/5-6

En ce que ele disoit ce, Galaad, qui estoit devant, hauce sa main ...

C<sub>c-3</sub>

S

V

その他, *Mort Artu*, 88/2, 99/8, 100/15, etc.

vi) endementres(endementiers) que-PROP.

この項目についてもC<sub>c-3</sub> VS語順の用例とC<sub>c-3</sub> SV語順の用例が見られた。後者については指摘があるが<sup>25)</sup>、前者についての記述は、筆者の知る限り見当たらない。

21. *Mort Artu*, 77/1-2

Endementiers qu'ele disoit tieus paroles, vint Boors qui ...

C<sub>c-3</sub>

V S

-その他, *ibid.*, 196/1, etc.

22. *Queste*, 112/5-6

Endementres qu'il parloit en tel maniere, il resgarde loign en la mer ...

C<sub>c-3</sub>

S V

その他, *Mort Artu*, 71/1, 71/47, etc.; *Villeh.* 81/1, etc.

vii) la ou-PROP.

C<sub>c-3</sub> V S 語順の用例が見られる。

23. *Mort Artu*, 44/23-25

Et la ou ele estoit a son privé conseil disoit ele aucune fois qu'ele ...

C<sub>c-3</sub>

V S

viii) par ce que-PROP.

C<sub>c-3</sub> V S 語順の用例が見られる。

24. *Queste*, 10/23-24

Car par ce que ele a oï parler de la semblance pense ele bien que ce soit

C<sub>c-3</sub>

V S

Galaad,

ix) por ce que-PROP.

C<sub>c-3</sub> V S 語順の用例が見られる。

25. *Mort Artu*, 70/11-12

; et por ce que il le savoient apertement, n'en i avoit il nul qui ...

C<sub>c-3</sub>

V S

その他, *ibid.*, 6/15, 71/10, 75/56, 104/67, etc.; *Queste*, 20/5, 64/30, etc.

x) puis que-PROP.

C<sub>c-3</sub> S V 語順の用例が見られる。

26. *Mort Artu*, 24/17-18

, car puis que il se velt celer, je feroie trop grant vilenie outretement,

C<sub>c-3</sub>

S V

その他, *ibid.*, 5/17, 24/14, 77/41, etc.; *Queste*, 29/31, 67/22, etc.

xi) quant-PROP.

C<sub>c-3</sub> S V 語順の用例が見られる。このC<sub>c-3</sub> の用例の数は多いが, Moignet の引用例を挙げておくに留める<sup>26)</sup>。

27. *Mort Artu*, 30/6-7

Et quant il furent tuit apareillié, messire Gauvains vint a son oste,

C<sub>c-3</sub>

S

V

xii) se-PROP.

このC<sub>c-3</sub> もquant-PROP. に劣らず用例の数は頗る多い。28. のようにC<sub>c-3</sub> SV語順の用例が圧倒的なようであるが、C<sub>c-3</sub> VS語順の用例が何例か見出される<sup>27)</sup>。用例 4. に加えて、29. などが挙げられる。ただし、C<sub>c-3</sub> VS語順の用例については、1例を除いて、se-PROP. を従属節とする複文全体が更にそれを包み込む従属節の中にある。

28. *Mort Artu*, 22/2-3

, car se il eüst onques targié, il en peüst bien morir;

C<sub>c-3</sub>

S

V

29. *ibid.*, 79/21-22

; et se ge nel puis fere, ge vos di que, se ele estoit ma mere,

C<sub>c-3</sub>

n' i enterroie ge mie;

V

S

その他, *ibid.*, 41/53, 50/47, 146/48, etc.

xiii) si tost comme-PROP.

これについても、C<sub>c-3</sub> VS語順の場合とC<sub>c-3</sub> SV語順の場合が見られる。後者についての記述は見られるが<sup>28)</sup>、前者については、筆者の知る限り見当たらない。

30. *Queste*, 279/1-2

Si tost come Galaad fu deviez avint illuec une grant merveille.

C<sub>c-3</sub>

V

S

31. *ibid.*, 278/13-15

Si tost come Galaad ot fete ceste requeste a Notre Seignor, li prodons

C<sub>c-3</sub>

S

... prist Corpus Domini sus la table ...

V

xiv) tant comme-PROP.

C<sub>c-3</sub> VS語順の用例が見られる。

32. *Mort Artu*, 25/48-49

Tant comme li chevalier sistrent au mengier, servi la damoisele;

C<sub>c-3</sub>

V

S

xv) tout ensi comme-PROP.

C<sub>c-3</sub> VS語順の用例が見られる。

33. *Mort Artu*, 53/17-18



れた結果を表にまとめておく（○印は、その語順の用例が確認できたことを示す。他の文献に指摘はあっても、散文の用例によって例証されていないものは含めていない）。無論、この結果は、あくまで叩き台であって、将来、修正の可能性があることは言うまでもない。また、(II)に属する項目について、CVSとCSVの頻度の差は含まれていない。従って、網羅的にC<sub>0</sub>の項目を調べたり、必要なものについてはその頻度も求めると共に、この2つの語順の差をもたらす要因について考察することを当面の課題としたい。

また、Wartburgによれば<sup>29)</sup>、12世紀には文は極めて頻繁に直接被制辞(régime direct: C<sub>00</sub>を指す)で始まったが、2つの格の区別がなくなり、フランス語は構文の自由も失って、14世紀以後は文中の位置がSと直接被制辞を区別する唯一の方法となり、被制辞(régime: C<sub>00</sub>+C<sub>01</sub>のことかCのことか不明) - V - Sの構文は甚大な打撃を被ることになった。それでも、どうしても語順によるSと被制辞の区別が必要なのは、文の理解に混乱が生ずる恐れのある場合だけで、そうでない場合でも被制辞 - V - Sの語順が禁じられるのは17世紀に入ってからにすぎないとのことである。13世紀という時期はこの重要な変化の真っ直中であり、本稿で扱った問題はこの変化とも密接に関わっているものと思われる。その関わり方はどのようなものか、また、ラテン語から現代フランス語へ至る語順に関する更に大きな流れに、この問題を位置づけて行くことも今後の大きな課題である。

## 注

1) この用語については、本文中を参照。

2) Comrie(1981), pp. 86-87にも述べられているように、厳密には、「構成素順序(constituent order)」のままがよいのかもしれないが、「語順」という呼び名の方が一般的に確立されているので、Comrie同様、筆者もこちらを用いることにする。

3) cf. Moignet(1979), p. 357; Ménard(1976), pp. 53-54, § 37; Kibler(1984), pp. 3-4; Bonnard & Régnier(1989), p. 184. 筆者は以前、拙論(1986) (cf. 参考文献)の中で、S, V (助動詞, 使役動詞などを含む), 動詞の被制辞としての不定詞(Inf)の語順について、また更にその不定詞の主語ないし直接目的補語が名詞(句)である場合の語順についても調査、分析を行なった。その後、この後半の部分と関係するKok(1987) (cf. 参考文献)も発表されている。拙論によれば、S, V, Infの3要素による語順では、SVInfが大多数であり、Inf V Sはほとんど皆無に近かった。Infは構成素Cの一部でしかないが、S, V, Cで考えた場合とは頻度が異なっているところにCがInfである場合の特徴があると言えるかもしれない。

4) Ménard(1976), p. 54, § 38; Kibler(1984), p. 4.

5) 従属節とは複文のそれを指し、自立節とは独立節(proposition indépendante) (すなわち単文)と複文の主節を含めた用語である。cf. Bonnard & Régnier(1989), p. 184; Foulet (1928), p. 307, § 448; Ménard(1976), pp. 53-54, § 37.

6) Foulet(1928), pp. 307-308, § 449- § 450; Ménard(1976), pp. 52-53, § 36; Kibler(1984), p. 5. なお, この場合, CVSのVとSの間に, 稀ではあるが, 他のCが割り込んで入ることもあるが(cf. Moignet(1979), p. 359), これもCVSとして扱う。

7) Moignet(1979), p. 357; Ménard(1976), pp. 52-53, § 36. ただし, Ménardは, この版では“Lorsque le sujet est un pronom personnel, il est omis.”としていたのを, 1988年の改訂増補版では“..., il est souvent omis.”(下線部筆者)と訂正している。

8) cf. Ex.: *Mort Artu*, 1/8, 4/21, 5/16, 8/4, 11/4, 11/12, 12/35, 13/14, 14/23, 14/35, etc. ただし, 8/4, 12/35, 14/35 は従属節内の用例。

9) cf. Wartburg(1971), p. 103.

10) この用例のlaのようなVの前の補語人称代名詞弱形, 再帰代名詞弱形se(cf. 用例 7.), 否定のne(cf. 用例 4.), 中性代名詞のen, y は語順の主要構成素ではなく, 接語(clitique)としてVの一部に含まれる。

11) これを, 用例 1. と併せて見てみると, SとVの倒置は, siというCが節頭(単文なら文頭)に出ることによって引き起こされており, siがquant の従属節に続いて現われなければ, quant の従属節が文頭にあっても, 次の用例のように倒置は起こらない。

*Mort Artu*, 25/26-29

Et quant il se furent assis au souper(C), la damoisele(S)[qui ...]  
demanda(V) a monseigneur Gauvain la verité del tornoiement,

これにより, quant の従属節は倒置に関して非関与的であることが分かる。

12) por ce queが従属節を構成しており, その中に複文があると考えられる。

13) Foulet(1928), pp. 307-309, § 450- § 452 では, Cの代わりに被制辞(régime)と呼んで, この辺りの困難さについて述べている。

14) cf. Foulet(1928), p. 312, § 456.

15) cf. Foulet(1928), p. 309, § 451, p. 311, § 451; Moignet(1979), p. 287, p. 358; Ménard(1976), pp. 52-53, § 36.

16) cf. Ménard(1976), p. 53, § 36, Rem. 1.

17) cf. Foulet(1928), pp. 311-312, § 455.

18) cf. Moignet(1979), p. 291.

19) cf. Foulet(1928), p. 287, § 420, p. 310, § 453. Moignet(1979)は「文頭の等位接続詞et, ou, ne, maisはSの後置は引き起こさない」(p. 357)とだけ述べている。

20) cf. Foulet(1928), pp. 311-312, § 455.

21) 「一文型」とされているのは, ainz(ainçois) que-PROP., la ou-PROP., por ce que-PROP., quanque-PROP., tout ensi comme-PROP., 「並列型」とされているのは, a ce que-PROP., cum-PROP., des que-PROP., en ce que-PROP., endementres que-PROP., puis que-PROP., quant-PROP., qui-PROP., qui que-PROP., se-PROP., si tost comme-PROP.

である。なお、qui-PROP. と qui que-PROP. は、構成素Cとすべきかどうかという点で多少問題もあり、他のものと異なるので、本稿では、取り敢えず扱わないことにする。

22) cf. Foulet(1928), p. 312, § 456; Moignet(1979), p. 358. 太古(1991)によれば、12世紀以降は(韻文も散文も含めて)「一文型」(C<sub>c-3</sub> VS語順)であり(cf. p. 25), 11世紀は(韻文資料によれば)「並列型」(C<sub>c-3</sub> SVまたはC<sub>c-3</sub> CVS語順)が優勢であるとされている(cf. p. 29, 31)。

23) cf. Moignet(1979), p. 238.

24) cf. 注21).

25) cf. 注21).

26) cf. Moignet(1979), p. 358.

27) cf. 太古(1991), p. 33, 注5). この注で指摘されているように、これらの用例に共通する特徴として、主節が否定文である点が挙げられる。

28) cf. 注21).

29) cf. Wartburg(1971), pp. 129-131.

#### 参考文献

- Bonnard, H. & Régnier, C. (1989): *Petite grammaire de l'ancien français*, Magnard.
- Comrie, B. (1989): *Language Universals and Linguistic Typology*, 2nd ed., Blackwell.
- Einhorn, E. (1974): *Old French: A Concise Handbook*, Cambridge Univ. Press.
- Foulet, L. (1928): *Petite syntaxe de l'ancien français*, 3<sup>e</sup> éd., CFMA, Champion.
- Kibler, W. W. (1984): *An Introduction to Old French*, MLA.
- Kok, A. de(1987): 'La place du complément nominal de l'infinitif en ancien français: *il leur enseigne l'uis a brisier* versus *si les mist on a chel avoir warder*', *Etudes de linguistique française offerts à Robert de Dardel par ses amis et collègues*. Textes réunis par Brigitte Kampers-Mahne, Rodopi.
- Ménard, P. (1976): *Manuel du français du moyen âge; 1. Syntaxe de l'ancien français*, 2<sup>e</sup> éd., SOBODI; 3<sup>e</sup> éd. (1988).
- Moignet, G. (1979): *Grammaire de l'ancien français*, 2<sup>e</sup> éd., Klincksieck.
- Pearce, E. (1990): *Parameters in Old French Syntax*, Kluwer Academic Publishers.
- Wartburg, W. von(1971): *Evolution et structure de la langue française*, 2<sup>e</sup> éd., Francke.
- 今田良信(1986): 「古フランス語の「動詞+不定詞」構文に於ける語順について——13世紀の散文を資料として——」『広島大学文学部紀要』, 第45巻, pp. 473-496.
- 太古隆治(1991): 「古仏語複文の二文型について」『広島大学フランス文学研究』(広島大学フランス文学研究会編), 10, pp. 19-34.